

ろくべん館だより Vol.39

『再び、山に生かされた日々』

「カラムシが刈り時だよ」と電話があった。電話のヌシはわれらの師匠、今年八十七歳になるおばあちゃんだ。さっそく仲間に連絡を回して、作業の日程を決める。カラムシは軽くて丈夫な繊維が取れる草で、昔から縄に縫ったり穀物を入れる袋に織ったりしたものだ。

もう何年もおばあちゃんから芋引き（繊維の取り方）を教わってきたのに、いざやろうとすると、「あれ、どうやるんだっけ？」と、習ったことをすっかり忘れて振り出しに戻っていることに気づく。師匠の手元を見ながら「ああ、そうだった」と思い出し、ぎごちない手を動かし始める。そのたびに「おばあちゃんの手はすごいなあ」と尊敬せずにいられない。そして、こういった技術を伝授してもらい、一緒に作業をすることの楽しさというのは、まったくたまらないものなのだ。

電話のあった同じ日の夜、飯田に『越後奥三面（おくみおもて）一山に生かされた日々』というドキュメンタリー映画を観に行った。この映画は、三年前の三月十二日、あの東日本大震災の翌日に大鹿で上映したものだ。山形県との境に位置する新潟県北部、深い山懐に抱かれた朝日村奥三面の四季を通した人々の暮らしを、四年に亘って丹念に記録した作品である。

奥三面の人々の行動範囲は、季節によって大きく広がったり小さく縮んだりする。正月は行動範囲が最小となる。人々は集落から出ず、しきたり通りの正月行事をとりおこなう。そして寒の入りから堅雪の季節に男たちは狩りへと、一挙に行動範囲を広げる。

雪が溶け、植物が芽を出し始めると、今度は家族ぐるみで山菜採りに山へ広がってゆく。奥三面のぜんまい採りは、現金収入になる。年間の収入の半分にのぼるといふほど、春の大切な行事であった。学校は「ぜんまい休み」となって、子供から年寄りまで、犬も猫も家族を挙げて「ぜんまい小屋」に移動しての作業となる。山で採取したぜんまいを小屋まで運び、そこでゆでて干す。十日間ほど滞在する間、家族のそれぞれが自分のできる役割を果たす。小屋で食べるご飯は、周辺で採れる山菜を調理して、それはそれはおいしいそうな食卓だった。贅沢な皿が並ぶわけではないが、何より一家総出の労働が一番の健啖の秘訣であった。

それが過ぎると、集落内の田畑での農作業が中心となる。作物の植え付けや田植えが終わると、焼畑や川漁の季節となる。村人の行動範囲がぐっとせばまる夏である。秋になると、また人々はきのこ採りや猟に山へ出かけてゆく。そして雪が降りはじめると、家の周囲にとどまって正月を迎える準備をする。

奥三面には旧石器時代の遺跡も縄文時代の集落跡の遺跡も見つかるほど、三万年の長きにわたって人が住み続けてきた土地であった。これだけの山からの恩恵を享受してきた住

みよい豊かな土地が、三〇年前にダム湖の湖底に消えた。

この映画を観ていたら、庭先に豆やキビ、山の胡桃や栗を干していたちょっと前の釜沢の風景を思い出した。そういえば、上蔵で育ったおばあちゃんは、子供のころに野ヶ池まで栗を拾いに行った話をしてくれた。夢中になって拾っていたら、背負いきれないほどの重さになっていた。かといって置いてくるのも惜しいと、必死になって山道を背負って下りてきた。家に帰り着いたとたん、へなへなとくず折れてしまったという。取ってきた栗を計ってみたら、七斗あったそうだ。話し終えた後、おばあちゃんは「ハハハ」と空を向いて笑った。今、野ヶ池周辺にそんなにたくさんの栗の木は見なくなったが、数年前、鳥倉林道を車で通った時、タイヤの下でパンとはじける音を聴いた。見れば、道路の上に轆かかれた栗がいくつも潰れていた。

奥三面の映像は今から三〇年ほど前のものだ。すぐ手の届くような気のする過去なのに、その暮らしぶりは現在とははるかにかけ離れているように感じる。ここには観光も入りこんではいなかった。人は山と正面から向き合って暮らしていた。

大鹿でも年配者の話を聴くと、山を越して静岡まで魚釣りに行った話、ムササビを撃ちに遠くまで行った話、決まった日にみんなが一斉に草刈り場にのぼって行った話、春の山菜採り、秋のキノコ採りや木の実拾いの話、炭焼きや焼畑の話、人々は随分と四季を通じて奥山まで入って行ったものだと思う。今では林業も衰退しているし、狩猟をする人も減っている。おいしい山栗やクルミがなくても家の周囲で拾うくらいで、山に入って拾うという人は多くはないだろう。

山の恩恵は昔ほど豊かではないのかもしれない。しかし、それでも天然の濾過装置をくぐって湧き出る水を汲むことができる。深い森の吐きだすきれいな空気をいつも吸うことができる。山を下ればなかなか手に入らないものが、ここにはある。

どこかで戦争が起これば、石油やガソリンが値上がりするし、どこかの国が干ばつになると小麦や大豆など食卓に欠かせぬものが不足する。国内の農業地帯が放射能に汚染されれば、安心して食べられるものかどうか気に揉まねばならない。山には燃料がある。農地があれば、自分の家で、あるいは地域で食糧が得られる。政治や経済が今のような状態にあるとき、私たちは今一度、山村のもつ豊かさに注目すべきなのかもしれない。

カラムシの芋引きをする愉しさは、昔から人々が営んできた山に生かされた暮らしにちょっとだけ触れてみる愉しさがある。わが身で体験できる自給の小さな一歩である。こういう作業は一人でやってもおもしろくない。老若混ざってやるのがいい。おばあちゃんの確かな手元から繰り出される緑色の美しい繊維をみていると、幸せを感じずにいられない。